

セ ン サ ー

2003年 1月号 第36号

東京温度検出端工業会 会報

年 頭 所 感

2003年1月

会 長 荻 野 紘 一

会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。平素は会の運営にご理解とご協力を戴き、有難うございます。

今年の干支は癸未（みずのとひつじ）で、古来から羊は金運に恵まれ、家運の隆盛を象徴する動物と言われて崇められてきました。中国では羊の読み「羊（よう）」は「陽（よう）に通じる事から隆盛吉祥の象徴とされています。陰陽の「陽」は太陽を表し、エネルギーそのものでもあります。今年は果たしてこの様な言い伝え通りになるでしょうか？

さて、昨年の我国の産業、経済界および科学技術について総括してみますと、1年を通じて叫ばれてきました「構造改革」による日本経済再生へ向けた取組みは、不良債権処理をめぐる金融政策の転換などもあり、混沌とした状況が続いています。また、益々深刻さを増したデフレ経済下において新たな企業統合や業界再編がドラスチックに進みました。一方、本年3月に決算を迎える企業の昨年9月の中間決算でV字型回復を果たした企業が目立ちましたが、これは'01年度に実施した大規模なリストラ効果によるところが大きく業績回復によるものではありませんし、過剰債務を抱えた企業の市場撤退も相次ぐなど、産業、経済界は引続き調整過程にあります。更に、社会不安を招いた事の一つに、大企業によるさまざまな偽装事件やトラブル隠し、と言った不祥事が年間を通して続発し、モラルが凋落し、企業の抱える構造の問題が浮き彫りになったことが挙げられましょう。毎年繰り返されるこれらの不祥事は、当該企業にとって長年に亘って築き上げてきた社会的信用や地位を一挙にして崩壊する事となり、一企業人として、最も心すべき事であります。

目を科学技術の面に向けますと、何と言っても小柴昌俊東大名誉教授と、田中耕一島津製作所フェローのノーベル賞受賞でありましょう。科学技術創造立国を目指す日本の実力を世界に示しました。特に田中耕一氏は民間企業の研究者であり、後に続く研究者や、多くの企業に勇気を与えた事に意義があります。この様に、科学技術立国としての地位を確固たるものとしてきましたが、その一方では、国際競争力に対する世界の評価は下降線を辿っており、スイスの国際経営開発研究所の発表によれば、91年には1位だったものが00年度には31位までランキングの順位を下げています。その要因の一つに、国力をつけると言う国の戦略的政策の無さが指摘されています。しかし、ここへ来て内閣府では戦略の立案に向け動き始めている様ですし、00年度の日本の研究費は米国の半分ですが、先進主要国の中では群を抜いた存在であり、国内特許件数や研究者数は世界No.1です。従って、国家戦略と様々な施策を国益増大に向けベクトルを同一方向に転換できれば、将来の展望は

大いに明るいとは考えています。私達の業界でも皆様方の企業に於て更なる技術や品質の向上に力を注ぎ、企業内容の充実に結び付けていただきたいものと念願しております。

金融シンクタンクの03年度経済見とおしによれば、ほとんどの機関が0.1%~0.9%のプラス成長を予想していますが、ゼロ付近の成長に留まる踊り場局面になる可能性も指摘されており、厳しい年となりそうです。

さて、私は01年6月~02年11月にかけ、景気の神頼みではありませんが、伊勢街道を4回に分けて歩き、伊勢神宮へ参拝しました。伊勢街道は四日市の日永の追分で東海道から分岐して、伊勢湾沿いに南下し伊勢へと至る約18里の道中です。道中は追分から神戸(かんべ)、白子(しろこ)、上野、津、雲出(くもず)、松阪、小俣、そして山田、神宮(伊勢神宮の正式呼称)へと辿ります。このルートは近世にはほぼ固定され、幕府によって脇街道として整備されたものです。

「伊勢に行きたい伊勢路が見たい。たとえ一生に一度でも」と伊勢音頭にも歌われ、神宮への参宮は江戸庶民のあこがれでした。もともと神宮は皇祖神を祀る神社として一般人は参拝することが出来なかったのですが、平安時代以降天皇や貴族の権力が衰えると、武士や庶民にも伊勢信仰が広がり室町から戦国時代頃には庶民の御参りがかなり一般化していた様です。神宮は神秘的の宝庫と伝えられ、二千年を越えると言われる歴史、外宮、内宮を中心に125社を持つ総体として、年間千百回にも及ぶ祭り、20年に一度の再生を果す式年遷宮などがあり、今なお人々を惹きつける秘密があるようです。参宮の方法もいわゆる「本参り」が主流で、中には親や主人の許可無く抜け出して参宮する者もあり、これらは「抜け参り」と呼ばれ、主人らはこれをとがめる事なく帰ってきた場合はお祝いをして迎える習慣だったため、抜け参りは後を絶たなかったとされています。また、「おかげ参り」と称し、一時期に集中して参宮に押し寄せる大規模な集団参宮もありました。松阪に住んだ、国学者の本居宣長は著書「玉勝間(たまかつま)」で、宝永2年(1705)4月9日からの50年間に362万人の参宮者があったと記されています。

私は特に信仰心が強い訳ではありませんが、この慌しく、追い立てられるような世代にあっても現在なお多くの人々が参宮に訪れているのを見ますと、日本人の心の奥にはやはり伝統文化や奥深い自然に接し、心の安らぎを求めるのも極く自然のことと思われるのです。ゆっくりとした精神的ペースに価値観を求め、見出してもいいのではないかと思います。

本年は会員の皆様方にとりまして、より良き年となりますよう祈念いたしまして、年頭のご挨拶といたします。

以上

会の動き

- ◎平成14年2月1日 理事会。総会の日程について。
新春懇親会。上野「水月ホテル」において、参加者 43名。
- ◎平成14年2月22日 第43回技術懇談会。参加者 25名。
第2期温度計実務講座を終了して、
㈱横河総研 小川実吉氏。
湿度の計測技術と標準供給体制について、
(独)産業技術研究所 高橋千晴氏。
白金抵抗温度計を参照標準として熱電対校正の不確かさ、
山里産業㈱ 水真陽一氏。

- ◎平成14年4月11日 理事会。総会に提出する議案の審議。
- ◎平成14年5月24日 定時総会。
第28期事業報告、会計報告、及び第28期事業計画を審議のうえ承認。
慶弔費についての内規を作成し、報告した。
総会終了後、懇親会を行った。参加者 33名。
- ◎平成14年6月28日 第44回技術懇談会。参加者 25名。
三宅島火山灰の利用技術、
都立産業技術研究所 大久保一宏氏。
火山灰を利用した屋上緑化花壇の温度測定、
都立産業技術研究所 尾出 順氏。
ISO14000取得よもやま話、
林電工(株) 池上宏一氏。
- ◎平成14年9月5日 理事会。秋の行事日程、及び内容について審議。
- ◎平成14年11月7日 工場見学会。参加者 30名。
キッコーマン醤油、日本電子力発電(株)東海発電所。
- ◎平成14年11月20日 第45回技術懇談会。参加者 25名。
米国シカゴにおいて開かれた、第8回国際温度計測会議に参加された方々により、会議の印象等の報告をしていただいた。
報告者。
(独)産業技術研究所 清水祐公子氏
東京都技術アドバイザー 小川実吉氏
都立産業技術研究所 尾出 順氏
(株)日本熱電機製作所 童子俊一氏
林電工(株) 稲見晃宏氏
- ◎平成14年12月5日 理事会。講演会、及び新春懇親会の日程、内容について審議。

平成14年度工業会工場見学会報告書

林電工(株) 桐原 浩樹

【日程】：11月7日(木)

【スケジュール】：8：00 上野駅出発

9：00～10：00 野田キッコーマン物知り醤油館

12：00～13：00 日立おさかなセンター「海鮮茶屋濱膳」にて会食

13：20～15：00 日本原子力発電(株)東海発電所

17：40 上野駅到着解散

【野田キッコーマン物知り醤油館見学概要】

醤油の製造工程は、大きく4つに分類される。水を加え蒸した大豆・炒って砕いた小麦に微生物こうじ菌「キッコーマン菌」を加えて、ねかせる①「製麹工程」、醤油麴に食塩水を加え、もろみタンクの中でもろみを約6ヶ月かけて発酵・熟成させる②「発酵・熟成工程」、熟成したもろみを布に

含ませ、折り重ねた何重もの布を上から強力なプレスにかけ、生しょうゆを搾り出す③「圧搾工程」、加熱殺菌・検査後の④「つめ工程」である。④は、別工場で行っているため、①～③を見学できた。どの工程もキッコーマン独自のこだわりが感じられた。

【日本原子力発電(株)東海発電所見学概要】

実際に中に入って見学できたのは、東海第二発電所の原子炉で作られた蒸気で回るタービン発電機がある「タービン建屋」だった。ウランの核分裂によって蒸気を発生させる役割を持つ「原子炉建屋」は、定期点検中のため外から見ただけであった。その他の施設もバスに乗って外から見学した。原子力の施設で一番心配なのは安全性であるが、厳重な安全対策がなされており安心して見学できた。「タービン建屋」の中に入る際もヘルメットや被爆を防止する服を着せてもらい、見学終了後も機械で被爆度を検診して安全性を確認できた。このような安全性を確保しているのは、実際に働いている方々の涙ぐましい努力であることを忘れてはならないと思った。

また、厳重な安全対策が採られていた。アメリカの爆弾テロ以降、発電所は重要安全対策施設になったとの事である。具体的には、門に車が突っ込まないようにジグザク走るようにポールが用意されていたり、実際に発電所施設に入るときも、空港よりも厳しい金属探知機や、持ち物検査などがあった。

【総括】

工場に温度センサーがどのように使われているかを見るのが目的だったが、実際この目で見ることができなかった。ただ発電所の方が、施設に測定箇所が、1000ヶ所単位であるとおっしゃっていたので、温度管理の重要性を認識することができた。今回2ヶ所の施設を見学し共通していることは、安全に管理することを忠実にやっていることだった。われわれ温度センサー業界も、安全をより再認識する必要があると思った。

最後に、このような見学の機会を与えてくださり心よりお礼申し上げます。

編集後記

1年前のこの同じ欄を読みますと、景気の悪い話ばかり書いています。この先の見通しの悪さについてもふれていますが、1年間終ってみてどうだったでしょうか。あまり良くはなかった。しかし、何とか生きのびてこられた、といったところででしょうか。

いつでも、この先のことは誰にもわかりません。過去のように右肩上がりやで経済が拡大してゆくということは、もうないだろうということは確かなようで、デフレ圧力のなか、低成長の経済状態が続くのでしょうか。このなかでいかにして収益をあげ、会社を発展とはいえないまでも継続させてゆくか、といったあたりでしょうか。

少し、消極的に過ぎるかもしれませんが、まずは雇用を守り、事業を継続させてゆくことが大切な時のように思います。

平成15年1月発行 No.36

発行所 東京温度検出端工業会

事務局

東京都文京区本駒込6-5-5 (林電工株式会社)

電話 3945-3151